

書評

山口 重 克

『価値論の射程』

東京大学出版会 1987. 11 ix+204 ページ

本書の前半(第Ⅰ部)は「個別的流通主体と社会的生産」、後半(第Ⅱ部)は「資本論」の価値論の諸問題とそれぞれ題され、いずれも4章に分れている(以下たとえばⅡの3で第Ⅱ部第3章を指すことにする)。大ざっぱにいうと山口氏の積極的な主張はすでに前半で示され、後半はそれを〈資本論〉と〈宇野原論〉の文献的研究で補足するという構成になっている。しかし全体を通じて一貫しているのは、厳密で細心なテキストクリテイクに基づいた良心的な研究であるといえる。この山口氏特有の手堅さは、もとより私などに真似のできるものではないし、日本におけるマルクス経済学研究の優れた伝統をも体現するものであって、それには先ず最高の讃辞をおくりたいと思う。しかしいかなる美徳も行きすぎでは弊害に通じかねない。あまり文献に忠実すぎると木をみて森をみないことにもなる。マルクスにしても宇野にしても不用意あるいは不適切な言説がないとはいえないのであって、それをむやみにヒネクリ回すのが建設的とは限らない。時にはもっと大局的な見地に立ち、原理論の本来の意義を反省してみるのも有意義ではなからうか。そう考えて以下では思いつくまゝ勝手な意見を述べさせて頂くが、私としては山口理論の全貌を熟知している訳ではないので、誤解や曲解があるかも知れない。そういう場合にはあらかじめ御寛恕を乞いたいと思う。

1. 原理論の性質

はじめに私自身が原理論の性質をどう理解するかについて若干のべておきたい。原理論=資本弁証法なるものは単に「現実の資本主義経済を分析する一般の基準」であるばかりでなく、資本主義以外の社会を研究するさいにもその理論的な原点=「ゼロ」を成す。すなわちそれがなければそもそも社会科学の科学性の根拠もあいまいになるという性質のものである。どうしてそうかという、原理論だけが資本主義という転倒した社会を完全に、しかも客観的に、定義(規定)するからである。客観的というのは「われわれ人間」が外からこれを定義するのではなく、資本自身をして「自分はこういうものです」と言わしめることによって、資本主義をいわばその内面から規定するという意味である。ほかの社会にはそんなこ

とはできない。物化作用(reification)によって転倒している資本主義にだけそれができるので、それを行う資本の純粹な自己規定が社会科学の原点となるのである。

原理論の主体は人間関係を物化し資本主義社会から「人間臭さ」を払拭する資本でなければならない。だからこそ原理論は人間的主体性から解放されて客観的でありうる。従って原理論の中には行動の主体としても分析の主体としても生身の「われわれ人間」を介入させてはならない。たとい商品所有者とか資本家として人間らしいものが登場しても、それはあくまで資本の化身=人格化としての人間にすぎない。階級闘争をしたり社会主義を希求したりするものではない。そこに登場する人物はすべて資本に糸を引かれた人形にすぎず、舞台を眺めて泣いたり笑ったりする「われわれ人間」とは違う。そういう人間が何処にも居ないと言っているのではなく、観客席の方にだけ居るというのである。観客席にそういう人間が居なければもとより階級闘争も社会主義もありえないことになってしまう。だが原理論の舞台はそういう人間から独立して客観的でないと困るのである。

従来マルクス主義はこの点を明確にせず、役者も観客も入乱れてランチキ騒ぎをするのが理論と実践の統一だと思っていたが、それはイデオロギーと科学を混同するものだ批判したのが宇野なのである。その感化を受けた山口氏だからこの点は賛成なのかと思っていたらⅠの1ではそうでないようである。こゝでは川合氏や広松氏から不健全な影響をうけ分析の主体(観察者)と行動の主体(当事者)が区別され、「原理論の世界で行動する当事者」とは別に「原理論を展開する分析者」が居ることになっている。この後者について山口氏は「受身の進行係り」などとも説明しているが、「対象と課題の選択は分析主体の問題関心ないし思想にかゝる問題」だということのだから、これは明らかに観客席側の「われわれ人間」である。しかし「われわれ」がいくら自分の主観的な関心とか思想に基づいて舞台を設定してみても、そこに当事者=役者が登場してこないのでは問題にならない。それを登場させるには結局のところ資本の脚本に沿って舞台を準備せざるを得ないのであるから、こゝで当事者とは別の分析者を強調することには、特に意味があるとは思われない。

しかしそれならば当事者の方はただ資本の脚本に従って決められた演技をすればよいのかというと、山口氏はこれもそうではないと考えているようである。すなわち商品・貨幣・資本の所有者を単にそれら流通形態の担い手という意味で人格化することには反対であり、むしろ

「所有者たちの意識と行動こそが流通形態を生成せしめる」というのであるから、こゝにも「われわれ」と同じような生身の人間が登場して来る。実はこの方が分析者の人間性よりも厄介な問題であるし、本書の全体を通ずる基本的テーマになっているので次にその点を検討しよう。

2. 流通と生産

たしかに流通はほんらいの生産にとっては外的なものであり、商人は必要がなければ生産に関与しようとはしない。しかし原理論で説かれる流通はあくまでも完全に発達した資本主義の流通面である。従ってとうぜん資本主義的生産を前提しているものでなければならない。だからこそアリストテレスの場合とは異って価値形態論もフルに展開しようのである。生産を包摂する以前の流通形態はそれ自体としても十分に発達をとげたものとはいえない。資本主義に先行する社会における商品・貨幣・資本は純粋な形態としても発育不全なものと言わなければならない。生産に先立って流通を説明するのは弁証法的に正しいやり方であるが、それは資本主義を無媒介的に(表面的に)みるとそれが商品の巨大な集積として現出するからであり、資本主義的生産が行われる前に単純な流通形態がそれ自体で完全な発達をとげるからではない。説明(といってもこれは資本の自己説明であるが)の順序として、実はすでに前提されている生産の側面を故意に伏せ(implicitにし)ておいて、先ず流通面だけを説こうというのである。

たしかに山口氏もいわれるように流通を単なる外皮と考えるのでは十分でない。資本主義における生産と流通の絡みあいはいもつと緊密である。比喩的にいえば、 A という元素と B という元素を加えあわせると、互いに分離したまゝ併存するのではなしに化学変化を起し A' と B' となって絡みあい連結する。その全体を観察すると外側は A' (流通面)内側は B' (生産面)となっている。私の考えでは原理論は先ず A' を流通論として説き、次に B' を生産論として説いたあと、両者の関連を分配論でまとめるべきだと思う。これに対し山口氏の考えは先ず A と B とを独立に(「緩い」関係として)説き、次にこれが(「締った」関係) A' と B' として結合する次第を説明したいと思っているらしい。ところが残念なことに実際にはそういうことはできないようになっている。原理論は資本が自分に自分を説きあかすものだから A' と B' しか存在もしないし認識もできない。この A' (資本主義の流通面)ももともとは A (まだ生産を包摂する前の流通)の発達したものであり、 B' (資本主義の生産面)は B (もつ

と一般的な生産)の特殊化したものであるということ、観客席にいる「われわれ」だけに理解しうることなのである。

資本主義を外から(たとえば唯物史観の立場から)みるときには、それは流通一般 A が生産一般 B を把握したものだと言ってもよい。しかしそれは原理論の立場ではない。Iの2で興味深く論じられている経済原則の二義性ということがそれをよく説明している。山口氏のいうように宇野が経済原則というときには商品経済的な効率性の概念を含んだ場合とそうでない場合とがある。簡単にいえば、いかなる社会の生産も技術的な生産可能集合のうち社会が必要とする最低産出量を充す点で行われなければならないが、効率性を考慮する場合にはそのうちで極大化条件をも充しうる(転形曲線上の)点に限定される。この「緩い」原則と「締った」原則の二義性は、同じ経済原則なる概念が原理論の外でも中でも問題にできるところから来ている。原理論の中で言うならばそれは「資本の見た」原則であるからとうぜん効率性原則を含んだ狭い意味になる。資本としてはたといあらゆる社会に共通とはいえ労働や生産の編成に経済外的要素を含めて考えることはできない。ところが原理論の舞台を観客として眺めている「われわれ」はもつと自由であるから「緩い意味の」原則を理解することができるのである。

私も「緩やか」な生産や流通のあり方を考えてみるこの有用性を否定するものではない。むしろ経済主義から解放されるためには必要・不可欠な操作であるとさえ思う。しかしそれはあくまでも観客席の特権というべきものであり、広義の経済学とか唯物史観とかの立場でなされなければならない。原理論の中に導入すべき考え方ではないのである。いいかえれば A や B を直接に原論の流通論や生産論の対象としてはならない。そうしたのでは原理論がほんらい持っていなければならない客観性がそこなわれる。山口氏は宇野がせつかく B' に先立って A' を説くという偉業をなしとげながら、その A' を A に“純化”しなかったことを嘆いているが、その批判は正しくないように思われる。

3. パラツキと基準

さて次にIの3の方法の模写に関する議論を検討しよう。方法の模写というのは「対象自身が攪乱的要素を捨象する場合に限り我々もそれを捨象してよい」という方法上の原則であるが、宇野はこれを資本主義の経済過程としての純化にも、価値法則によるゆきすぎの事後的訂正にもあてはめている。山口氏は前者の場合の攪乱要素は非商品経済的要素であるが、後者の場合にはそれは需

給の不均衡であり、むしろ商品経済に本質的なことであるとしている。私としてはいちおう宇野と山口氏との中間どころの立場をとりたい。純化傾向についてはふつう「19世紀中葉までのイギリス資本主義が現実に示した」ことになっているが、単に経験的な事実を解釈して純化したとかしなかったとか言ってもそれは確証しようのないことである。むしろそれは資本がほんらいもっている物化作用に基づくものとみるべきだろう。この抽象化作用は別の面からいえば原理論の舞台の上の人間と観客席の人間を分離する作用であるともいえる。すなわち人間関係が物化し間接的になるということは人間が愛国心とか利他心とかの人間の感情を忘れ去って、ますます利己心の権化ようになって資本に奉仕することに等しい。そういう意味で非商品経済的な要素を排除するのである。

しかし人間が今や純粋に資本の化身(人格化)としての行動に徹したとしても、そのため直ちに人間がほんらい持っている多様性までも喪失する訳ではない。すべての人間が同じ使用価値の組合せを消費したり画一的な行動をするのではない。そういう点でのバラツキやバラバラは原理論の舞台の上にも差し当り残るであろう。大きい人間もいれば小さいのも居る。それが良心的であったり狡猾であったりする。また性急なものも鷹揚なものも、等々である。資本にしても人間を材料として使っているのだからこういう多様性を無視することはできない。しかしそうかといってそれに引きずり回されては自分の論理を貫徹できない。そこでこれは純粋資本主義の内部で、その自己総合の過程で、処理されなければならない。資本弁証法では、そのあらゆる文脈で立ち現れてくる価値(資本の論理)と使用価値(人間的多様性)の矛盾をつねに前者が後者の制約を克服するというかたちで解決する。そのさいの抽象方法も「われわれ」が発明するのではなく、資本が自ら示すものに外ならない。価格機構もその一部である。このような使用価値的制約の克服ということと非商品経済的要素を落とすということは、見方によっては同じとも言えるし違っても言えるように思う。

以上のように人間的多様性に基づく個々人のバラツキやバラバラを基本的には使用価値的制約とみるならば、価値原理によるその克服は流通論でも生産論でも達成される。ただそのなされ方が違うだけである。山口氏は生産を包摂する以前の流通にはあくまでもバラツキが残るとし、これを個別的流通主体の無政府性といっているが、ふつう無政府性とはそういうことではなくて「各人が独自にかつ盲目的に商品供給を行う」ということを意味する。そのやり方がいかにバラバラであっても価格の変動

がバロメーターになって供給条件が修正される。価値法則の価格機構を通ずる事後の訂正である。だから個々のバラバラな商品供給者は「商品市場全体の需給の動向」などを知る必要はない。自分の商品が売れるか売れないかに応じて近視眼的に供給条件を修正しつづければよい。「どのような期間について利潤率を極大化すべきかについて基準がない」といっても、競争者がヨリ短期にヨリ高い利潤率をあげていることが解れば直ちにそれが基準となる訳である。このさいに供給条件の修正に制限がなければ、いかに個々の供給者がバラバラであっても同一種類の商品の価格は均等になる。地域的に価格差があってもそれが運送費以上にならないような裁定(arbitrage)が必ず行われる。そうでなければ「安く買って高く売る」可能性がフルに利用されていないことになる。

実際に価値尺度のところでは宇野が「繰り返し行われる」購買というのは、社会的な需要の変動に対して供給の方がいくらでも応じられることを含意している。骨董品や高級ワインのように供給の限られたものではいつまでも購買を繰り返すことなどできない。資本主義的に再生産可能な商品だからこそ、需要曲線が左右にシフトすれば供給曲線もほぼ同じ速さでついて来る。近代経済学でいう不変費用の商品ということになり正常価格が一定になる。これはもちろん生産的労働の異部門間の自由移動を前提していることであり、とくに貨幣との関係では金生産部門に対して当該商品にも適量な社会的資源が配分される傾向にあることを暗に物語っている。但しこゝではまだ生産面を明示したくないから「繰り返し購買される」で済んでいる。ただそれではあまりに不親切だという老婆心から「結局は生産過程自身によって」基準が出て来ると宇野が補ったのであろう。めくじらを立てるほどのことではない。

要するにどの商品も繰り返して購買されるような資本主義の流通面 A' に関する限り、山口氏の心配する個別的流通主体のバラツキにはそれほどこだわる必要がないのである。むしろ個別的流通主体が市場について不完全な情報しか持たず、その動向についての予想・判断・行動選択がバラバラなことが重要な意味をもつのは、資本主義以前の商売とか今日のようにもはや資本主義的とはいえない世界での流通 A においてである。ここでは紀伊国屋文左衛門にも大いに活躍して貰わなければならないし、アメリカ連銀の金利政策を下手に予測すれば大損をしたりする。こゝでは山口氏がしきりと強調する流通費用(といってもこれは原理論の流通費用よりも最近になって近代経済学者が注目しはじめた transaction cost の

方に近いが)も無視できなくなって来よう(Ⅱの3)。だがそのようなコンテキストは価値の概念を規定するにはこれまた著しく不適当なものである。

4. 価値の概念

価値というものは流通と生産のちょうど中間にあって両者を媒介する概念であるから、そのどちらかに吸収してしまおうとすると正しく理解できない。流通の方からだけみると価値は価格として自己を表現する商品の性質(等質性・交換性)とぐらいいしか言えないし、生産の側からのみみると社会の負担する実質的費用(生産的労働の支出)となってあらゆる社会に共通な実体面を誇張することになる。しかし価値とはもともとあらゆる社会に共通なものを商品経済に特有なかたちで表わしたものである。山口氏は従来の労働価値論が労働と価値と価格の3者の関連について前2者を一体的に理解して来たのに対し、自分は後二者を一体的に理解したいと言っているが(Ⅰの4)、私としてはむしろいずれの両極端も避けるべきだと思っている。

近代経済学の場合をみると、昔は主観的価値論を主張していたが、今ではそれが価格論に吸収されてしまい独立の価値論というべきものを持たなくなっている。それは基数的に可測な効用とか実質費用とかいう考え方が次第に淘汰され選好順位とか機会費用とかに取って替られた為であるが、それはけっきょく経済を完全に市場の枠内に閉じ込めたのと同じことになる。経済関係がすべて代替とかtrade-offといった市場内的な交換ないし選択関係とみられ、それ以外は経済関係と認めないというなら価値論は要らないのである。しかしマルクス経済学では資本主義という全面的市場経済が歴史的に特殊だと言って居るのだから、市場内で形成される価格関係があらゆる社会に共通な生産とどう関連するのかを不問に付する訳にはいかない。それを明らかにするために価格論とは独立な価値論が必要になるのである。流通論の内部だけで価値を理解しようとする企ては、けっきょく価値を価格(=交換価値)に解消しようとする近代経済学の轍を踏むことにならないだろうか。

もうひとつ言っておきたいのは、価値のように複雑で重層的な概念は形式的で一面的な定義では尽されないものであるということである。特定の抽象レベルでそれは商品の等質性だとか人間労働の凝固だとか言っても、それは然るべきコンテキストでは正しいに違いないが、それだけで価値概念が十分に規定されているとはいえない。弁証法は抽象(無規定)から具体(総合)への歩みを進めるに従って、何度も同じ概念に立ちもどり、重層的に新た

な規定を盛り込んで行くのである。これも資本の自己説明の一環であるから、その最終的な姿はすでに当初から予想されている。ただその重層性をいちどきに示すことはできないので、はじめは諸々の規定性を故意に伏せておいて順次それを開示してみせるという方法をとる。従って冒頭商品もとうぜん資本主義的に(というのは特定の使用価値には無関心に)生産された商品 W' であるが、態ととぼけてどんな商品でもいような顔をしているだけである。

このように生産された商品 W' は人間がみれば使用価値であるが、資本がみれば価値であり(商品の2要因)、とうぜん売りに出される。売りものだから先ず価格付け(価値表現)が必要になる。流通論はここから始まる訳であるから価値の由来を生産に溯って説明することができない。宇野がこれを同質性といっているのについて山口氏は「このままでは具体的に何を意味するのか明らかでない」とか「無内容な規定」(Ⅱの1)などとクレームを付けているが、それは生産面が伏せてあるから止むを得ないのであって、もっと具体的な内容に言及すれば価値尺度論で基準を持ち出す場合と同じ批判を受けることになる。もちろんここで重要なのは商品が使用価値としてではなく売りものとしてあると言うことであって、売られるべきもの=交換されるべきものの性質を「売りもの性」とか「交換性」とか呼ぶのはよい。しかし商品を売りものとみる場合には、その使用価値としての異質性は問題でないということから、他の商品と同質だということが直ちに言えるのでなければならない。この同質性を離れてただ売りものだとか交換力だといっても、それでは価値の規定として十分ではないように思われる。

それがどういう意味かを説明しよう。たとえば前近代的な商人資本が X という商品について地域的な価格差の著しいことに気付き「安く買って高く売る」行為に出たとする。この場合の商人にとって X の使用価値はもちろん問題にならないから X はたしかに売りものと観念される。だからこそ前近代的商人にも資本家的な蓄積ができる訳である。しかしこの商品 X は他の商品 Y や Z と同質であろうか。そちらの方は甚だ疑しいと言わなければならない。もちろん Y や Z にも価格差があったとすれば別の資本家がそれを売りものと観念したかも知れない。しかしそれだけでは X, Y, Z を同一市場内の同質な商品とする訳にはいかない。それらはいずれも別個に使用価値として生産されたもので、偶然に商人が地域的な価格差を発見して裁定(arbitrage)の操作に乗り出したに過ぎない。決してはじめから使用価値には無差別に

価値物として生産された W' ではないのである。本来の商品ではなく偶然の事情で商品になったに過ぎない。だから価値は主観的に観念されるだけで客観的にも存在するとはいえないのである。宇野が冒頭商品をとくに「歴史的単純商品」ではなく「資本家的商品」とであると強調しているのも、また流通論では価値法則の必然的根拠が論証できないと言っているのもこの理由に基づくのである。

価値とはもともと使用価値に対する無差別・無関心を意味する概念である。歴史的にはそれはたしかに生産に外部的な商人活動の中で主観的に形成されて来る。しかしこれもフルに発達するには資本主義の完成を俟たなければならない。すなわちあらゆる商品が使用価値には無関心に生産され、社会的需要の変化に応じて生産的労働が自由に異部門間を移動できる状態が前提されなければならない。あらゆる商品があらゆる商品と交換できるというのもこの事実に基づくのである。この点を忘れると生産的労働と非生産的労働の区別もあいまいになり、「商品といっても労働生産物だけではない」(IIの3)というように締りのない話になる。すでに指摘したように資本主義の内的論理を規定するには先ず純粋資本主義の流通面 A' を説き次いでその生産面 B' を検討するのが正しい。しかしそれは資本主義を離れた「緩い」流通一般論 A からはじめて、その中からだんだんに資本主義を手繰り出してこようとする「発生論」(?)とは意味が違う。このような点で、同じ宇野理論でも山口氏が学びとられたものと私が学んだものとの間にはかなり大きな懸隔が認められるようである。

〔関根友彦〕